
愛と憎しみを込めてこの歌を贈る(SH/オルラフ)

さなぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛と憎しみを込めてこの歌を贈る（SH／オルラフ）

【Nコード】

N8294I

【作者名】

さなぎ

【あらすじ】

Sound Horizonよりオルラフ。

イチヤイチャした2人が書きたかっただけです。

(前書き)

サンホラ二次創作です。

例えば、指先に触れたり。

例えば、その声に耳を澄ませたり。

例えば、その澄んだ瞳を覗き込んだり。

ただそれだけで――

「おはようございます」

心地よい声が耳に響く。

私は一呼吸してからゆっくりと振り向いた。

「お、おはよう」

そう喉から絞り出した声は小さいながらも彼に届いたようで、彼は何時ものように優しく微笑んでくれた。

「今日もここにいていいですか？」

そして彼はいつものように心底心配そうな顔でそう問うてきた。

「わ、私は全然構わないわ」

嬉しさが声に出ないように少し俯き加減で小さく言った。

すると彼はまたふわりと微笑んで私の隣に座る。

いつもと同じ。

いつもと変わらないこのやりとり。

彼とこうして一日過ごすことが当たり前となった今が嬉しくて然り気無く足をぶらつかせる。

クスリ、という声がしたと思ったらポロン、という音がして美しい旋律が流れ始める。

私は目を閉じてその音に耳を澄ませる。

暫くじっとそうしていたが、とうとう我慢出来なくなって唇を開いた。

先程までの気弱そうな彼女からのものとは思えない、美しい優しい歌が紡がれていく。

その優しいデュエットはゆっくりと静かな森に吸い込まれていく。

と、いつもと違いふと豎琴の音が止み、不思議に思つて瞳を開こうとすると唇に優しく何かが触れた。

先程まで歌を紡いでいた唇は動きを封じられ、驚いて瞳を開こうとしたがその前に彼は唇を離した。

驚きで見開かれた瞳はまっすぐに彼を捉えた。

が、すぐに瞳を開くんじゃなかったと後悔する。

顔のすぐ目の前、まだ唇が触れるか触れないかくらいのこの距離。

自分の鼓動が彼にも聞こえるんじゃないかというくらい大きい。

意図せず真っ赤になってしまった彼女を見て、彼は優しく微笑んだまま彼女を抱き締めた。

高鳴る胸を押さえきれずにそのまま鼓動が彼に伝わる。

それが恥ずかしくて慌てて彼を押し退けたらあっさり彼は離れてしまった。

自分でしたことだというのに若干の寂しさを抱えた胸を不思議に思う。

そんな彼女の心境を察してか彼は再び彼女を抱き寄せて、額に優しくキスを落とした。

彼の唇が離れてからも何故だか熱が冷めず、寧ろどんどん熱くなつていく。

朦朧としはじめた頭に何とか冷静さを取り戻そうと頭を横に振っていたが、急に彼が頬を包み込むようにしたのでピタと動きを止める。彼は私に視線を会わせると、どこか真剣な面持ちで唇を開いた。

「ラフレンツェ、――」

例えば、指先に触れたり。

例えば、その声に耳を澄ませたり。

例えば、その澄んだ瞳を覗き込んだり。

ただそれだけで——幸せだったのに。

「ねえ、オルフェウス……」

彼女の最期の渾身の歌は歪んだ音を響かせて、森の奥へと消えていった。

(後書き)

本当にイチャイチャしてる2人が書きたかっただけなんですごくめんなさい・・・；

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8294i/>

愛と憎しみを込めてこの歌を贈る(SH/オルラフ)

2010年10月15日00時49分発行